國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕田嶋一著『≪少年≫と≪青年≫の近代日本人間形成と教育の社会史』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小国, 喜弘, Kokuni, Yoshihiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000293

〔書評〕

田嶋一著『〈少年〉と〈青年〉の近代日本人間形成と教育の社会史』

小国喜弘

田嶋一氏による大著『〈少年〉と〈青年〉の近代日本人間形成と教育の社会史』が東大出版会から刊行された。三部構成、全十一章、ページにして全四五〇頁に及ぶ本書は、著者の院生時代にあたる一九七九年から二〇一二年にかけて個別に発表されてきた論文をもとにして完成された。本書の刊行によって、我々は改めて田嶋教育史学の全貌をまとまった形で読むことができることとなった。

一、近代日本における、人づくり文化の多様性と重層性

田嶋が問題にし続けてきたのは、学校教育という近代的制度の登場と普及によって、主として十代半ばの者たちが希求する生き方の規範がどのように変化したかである。「十代半ばの者」ということなれない表現を敢えて用いたのは、前近代が子どもか

ら大人へと移行する過程を辿ったのに対して、近代になって、子どもと大人との中間期として「青年」期が誕生することになった点を本書が詳細な論証によって明らかにしているからである。田嶋はこの「青年」期の人々が「〈よりよい自分をつくりたい〉」と念じ自主的に生き方を模索する姿に共感しつつ、そこで模索された規範が絶えず国家の支配へ絡み取られていく過程を丁寧に描き出す。

田嶋は本書において、必ずしも明示的に示されている訳ではないが、二つの対抗の中に人づくり文化の多様性と重層性を読み解こうとしているように思われる。第一は、近代の制度や思想、に対して、産育習俗や儒学など前近代の慣行や思想が、いわば長期的時間持続として影響を与えているという、いわば近代対前近代の対抗の歴史である。もう一つが、国家対民衆との対抗の歴史である。

ただし、この二つの対抗を田嶋が二項対立的に扱っている訳ではないことを大急ぎで付け加えておく必要があるだろう。例えば、近代対前近代の対抗において、前近代における人づくりと一口にいっても、田嶋が問題にしているのは、近世郷村社会における産育・子育ての習俗に止まらず、支配層・有識者層により導入された儒学の学問論や修行論、中世武士の養育法、芸能などの稽古論、幕藩体制下の昌平坂学問所や藩校などでの教授法など、多層的な伝統である。それらの伝統が近代の青年期に関する規範に影響を与え、あるべき青年像を多層化させつつ、同時に、近代を通して伝統的思想が読み解かれることによって、伝統思想自体の変奏が描かれることになる。また、国家対民衆という対抗においても、既に述べたように、田嶋は青年が自立に向けて、時に国家の論理からはみ出していく過程と、そこで青年たちの自立に向けた規範が国家へと再び回収されていく過程とを描き出す中で、国家の求める青年像と民衆の求める青年像とが相互に影響を与え合う様を冷静な筆致で描き出している。

以上のように、本書は、教育の制度史からでは見えてこない、近代日本における人間形成の文化の多様性と重層性を描き出している。

二、章構成

ここで本書の内容を各章に即して簡単に紹介しておこう。第一部「一人前に向けて」は三つの章で構成され、歴史学や民俗学の知見を踏まえて近世社会における子育ての習俗とその思想が描き出される。第一章「民衆の子育ての習俗とその思想」で

田嶋は、前近代の西洋の子育て習俗に関する西洋教育史の知見と対比させることで、その日本的特質を浮き彫りにしている。第二章「近世社会の家族と子育て」では、近世社会において単婚小家族の広範な成立など新たな条件の下で、「民衆の新しい教育への要求」が誕生していたことを描き出す。第三章「若者の形成と若者組」では若者組に着目している。田嶋によれば、若者に集団的アイデンティティを極めてスムーズに習得させていた若者組は、幕末になると、幕藩秩序の中に若者組が位置づけられて統治へと利用されていく。この統治技法は維新政府へと引き継がれ、明治国家は「青年修養の為の機関」としての青年会などへと若者組を組み込むことに成功することとなった。

第一部で取り上げた若者組に集う「若者」は大人の仲間であった。それに対して、子どもと大人の中間に「青年」がどのように誕生したのかを描き出したのが第二部「〈若者〉と〈青年〉の社会史」である。第一章「共同体の解体と〈青年〉の出現」によれば、青年の誕生は、教育の誕生とも密接に関連しており、背後にあるのは伝統的な共同体の崩壊だった。そして青年の誕生は、同時に青年期の実存の悩みが登場する時代をも意味していたのである。第二章「〈青年〉の社会史　山本滝之助の場合」では、「青年」としての自立に失敗した山本が、逆に共同体を基盤としながら、国家の青年運動のリーダーとして登場する過程を詳細に描き出す。そのことを通して、田嶋は自立を求める青年たちを「再編された村落共同体の中に囲い込み、国家の青年」が作られていく様を浮き彫りにしている。さらに第三章「〈修養〉の成立と展開」では、「新しい社会の中でいかに生きるか、いかに新しい自分を形成するかという課題」の下で「修養」という概念が成立したことに注目している。田嶋が描き出すのは、「〈よりよい自分をつくりたい〉」と願う青年の自主的な運動と、それを支配の側に回収しようとする政治とのせめぎあいの歴史であった。そこから読み手に印象づけられるのは支配の装置の巧妙さであり、支配から距離をとって「自主」的に生きることの難しさである。第四章「〈修養〉の大衆化　野間清治と講談社の出版事業」では、野間清治の生涯を詳細に描き出しながら、『キング』『少年倶楽部』などに即して、「修養」概念の登場とその変遷を具体的に描き出している。

第三部「近代化の進行と教育文化」が描き出すのは、「少年」概念の歴史的成立である。

第一章「〈少年〉概念の成立と少年期の出現　雑誌『少年世界』の分析を通して」では、雑誌『少年世界』を手がかりとして「少年」という概念の登場を論じている。「少年」という概

念の登場は「青年」という概念の登場よりも少し遅い登場であり、学校教育制度の中でその社会的心理的歴史的性格が彫琢されていった。第二章「一九二〇—一九三〇年代における児童文化論・児童文化運動の展開」では、白樺派の教師たちの運動、さらには生活綴方運動の中に、子ども自身の生活の中に独自の文化を発見し、文化の製作者として子どもをとらえようとする視線の誕生を高く評価している。第三章「青少年の自己形成と学校文化」では、教育の機会均等という近代社会の「見せかけ」の原則が、青少年の自己形成に与えた歪みが分析されている。戦前期の学校文化が与えた青少年の自己形成に与えた歪みは、総力戦体制による中等教育の崩壊によっていったん終わりを告げる。そして田嶋は、戦後改革における「中等普通教育」という新しい概念の成立に可能性を見出して筆を置いている。

三、「かすかな光」へ

本書全体を通して、改めて印象づけられるのは、本書が、院生時代の指導教員である大田堯の問題意識を受け継ぎ、深化発展させている点にある。大田が問題にしたのは、近代の学校教育の中での子どもたちや青年たちの疎外状況だった。その疎外状況を対象化する手段として、一九七〇年代には前近代の子育て習俗の慣行とその思想を検討し、八〇年代以降は主として生物学の知見を手がかりとして、「ひと」が「ひと」として育つことの意味を明らかにしようとしてきた。様々なサークル活動を通して多様な市民との対話を基盤として成立する大田の学問は、時代の困難の中でも「かすかな光」を求めることの重要性を示唆し、人々を励まし続けている。そのような大田の学問と姿勢は誤解を恐れずに言えば、田嶋に引き継がれ、近代日本の青少年の自己形成史を社会史的に描き出すという研究へと深化発展されている。青少年の「〈よりよい自分をつくりたい〉」という切実な希望は、常に国家へと回収されることになった。その意味において、近代日本の青少年の自己形成史は苦難の連続だった。青少年の前に立ちはだかった壁を描き出しつつも、例えば青少年の自己形成への希求が常に新たな「修養論」を誕生させてきたことに、田嶋は可能性を見ようとしている。近代日本の青少年の苦悩に寄り添う田嶋の研究姿勢は、國學院大學における学生たちとの膨大な対話の積み重ねの中で作られていったのではなかろうか。近代日本の青少年の自己形成史のなかに「かすかな光」を探り当てようとする本書は、困難な時代を生きる現代の青少年に対する、歴史研究を通した、激励の書

でもある。

（A5判、四六四頁、東京大学出版会刊、二〇一六年三月発行、定価八八〇〇円＋税）